

岡山大学准教授 中山芳一著「非認知能力が子どもを伸ばす」を読んで

1. はじめに

今回は、岡山大学准教授の中山芳一先生の著書「非認知能力が子どもを伸ばす」を読んで私が学んだことを述べます。

2. 私が学んだ大切な言葉

周囲の人たちは「○○君は頭がいいよね」とよく言いますが、それは「頭がいい」ではなく「勉強ができる」もしくは「テストの成績がいい」ということではないでしょうか。では、「頭がいい」とは一体何でしょうか。それは「情報選択力」「理論的思考力」「伝達力」「多面的思考力」「判断力」「問題発見力」「問題解決力」「行動力」「創造力」などであり、現代では、これらが「頭の良さ」として注目されるようになりました。このような数値化できない能力を「非認知能力」といいます。

非認知能力を向上させるには、その土台となる「自己肯定感」が、子どもが育つ力の原点となります。特に乳幼児期から4歳頃までは保護者をはじめとした子どもにとって重要な他者からの愛着関係が何よりも必要です。この愛着関係は、肌と肌との関係だけでなく、言葉などを通じた呼びかけとその呼びかけに応じるという呼応関係へ移行していきます。

子どもたちには過度な早期教育などによって何かができた時には受け容れられ、何かができなかった時には受け容れられないという経験はしてほしくありません。こうした経験をした子どもたちは、次第に自分より「できる人」にはへつらい、「できない人」には上から目線で見下すようになってしまいます。

子どもは自分という存在が無条件で受け容れられる経験から育まれた自己肯定感の上で、様々な非認知能力を獲得・向上していくこととなります。大人は子どもに一方的に何かをやらせるのではなく、子どものやりたいことができるように支えたり、気の合う仲間とコミュニケーションを豊かにとれるように支えたりといった役割を担いたいものです。

子どもが何かを達成できた時、そのできた結果を大人は評価しがちです。その子が多くの努力をせずに達成できたにもかかわらず「あなたは天才ね」などとほめると、子どもはほめられた喜びと同時に「努力しなくても自分はできるんだ」と認識してしまいます。こうした経験が蓄積すると、努力せずに結果だけを求める子どもに育ってしまいます。子どもが何かを達成した時には、その達成に至るまでの努力に着目して評価してあげるべきです。持続力の低い子どもは、生まれながらに持続力が低いとか、あきらめがちな性格を持ち合わせているとかではなく、「やり抜いた経験」を蓄積できていないのです。子どもが「やり抜いた経験」を積み重ねれば、自分はやり抜くことができると認識し、持続力を獲得・向上させていくこととなります。

3. おわりに

私たち放課後支援員は、こどもたちの努力を応援し、「やればできる」といった「やり抜く経験」を蓄積できるよう、こどもたちを支援していくことが大切です。

KM テクノソリューションズ代表 南側晃一